



雄国山のアトリエで陶器の製作に取り組む一重さん。手のなかで、土は静かな生命体へと姿を変えてゆく。

雄国山麓の高台にある一重孔希さんの陶房。なだらかな傾斜のある広い庭に足を踏み入れると、素焼きの陶仏たちがあちこちから顔をのぞかせていた。驚くのはその数、数、数。「いったん始めると一日に千体ぐらいいは造ります。これまでに、もう三万體は造ったと思います。ガレージがいつばいで、置く場所がなくて」そう言っつて、一重さんは笑った。

一重さんが雄国山麓の唐沢地区に登り窯を築いたのは今から二十年前。「車の音を気にすることなく、自然のなかでもが作れるというのは最高に幸せなことだと思います。安らぎを感じますね。陶房から見える町の風景や四季の色彩、虫や鳥の声、風の音は作品のなかに生きていて、一重さんは言う。「この辺りは、雪景色もまた格別なんです。塩川の美しさを本当に嬉しそうに語る姿が印象的だ。一重さんは、陶仏の他にも、会津の雪景色のように美しい白磁器を中心とした陶器や、狛犬など、魅力ある作品を数多く製作している。陶芸の魅力とは、と尋ねると「火と

風を 熾す人。

interview. 1



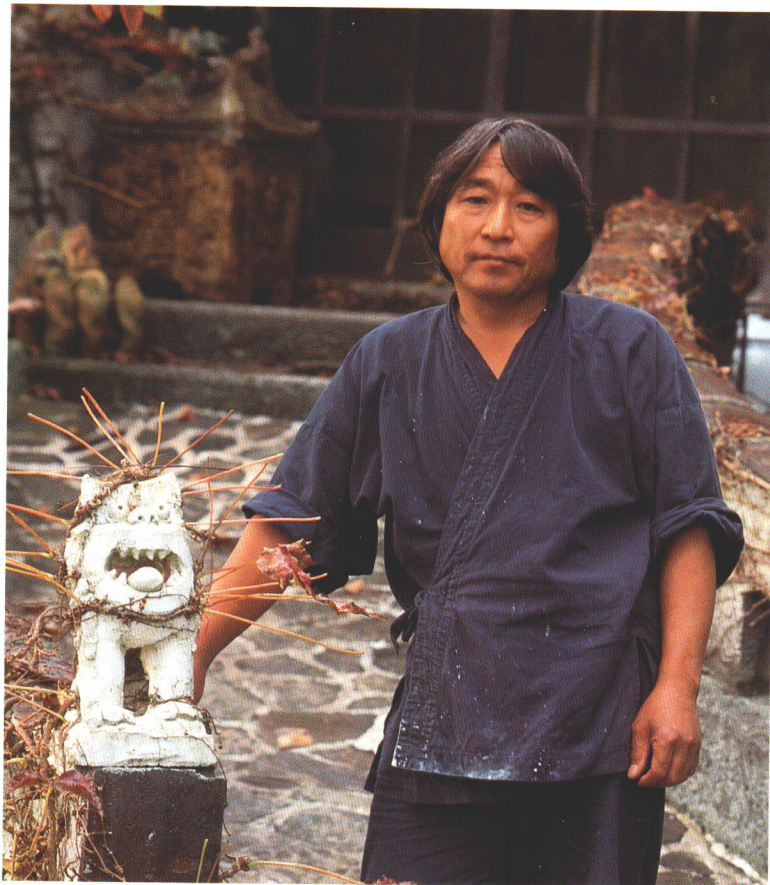
会津の雪のように白く澄んだ白磁器をはじめとする、一重陶房から生みだされた陶磁器の数々。

粘土のもつ無限の可能性ですね」とまつすくなまなきして答えた。

また、十年ほど前からは、毎年夏に陶房の庭で音楽コンサートを開催している。「いい音楽を聴いて、旨い

酒を飲む。ただそれだけのきっかけで始めたんですよ。」一重さんの一言一言は、どれも肩の力が抜けていて、それ自体が心地よい音楽のように聞こえる。「最初のうちは東京周辺からのお客さんが多かったんですが、最近になって地元の人が増えてきました。とても嬉しく思います。」

の笛を中心としたコンサートを、十年目でひと区切りとし、最近では中国の胡弓、シャンソン、インド音



一重 孔希 さん
Kouki Ichiju

塩川は、会津の中央にある、いい隣の町だと思います。特に町の中央に川が流れているところが好きです。この澄んだ流れがずっと保たれればいいですね。

楽など、そのジャンルは一層広がっている。さらには海外の作家との展覧会を開催するなど、エネルギーをギッシユな活躍を続けている。陶芸を愛し、酒を愛し、音楽を愛し、そして塩川を愛する一重さんは、なんとも魅力深い人である。

雄国山から生まれる 一重陶器の世界。

風を 熾す

塩川には、ひたむきな情熱を心に秘めた人がいる。万有を土に還し、万物を火に映し出す陶芸家。農業の新たな可能性に挑戦する人。町の歌の浸透に取り組む親子。塩川商人の心意気をのれんに受け継ぐ商店主。自らの情熱と信念に真っすぐに向かうその姿は、見る者の心を強く打ち、その熱い思いはやがて一陣の風となって塩川の町に吹きわたる。塩川には人々の心を魅きつける、清らかな風を熾す人がいる。